

Title	慈鎮和尚自歌合の古写本： 国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書所収「慈鎮大僧正御集」について
Sub Title	
Author	太田, 克也(Ōta, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2024
Jtitle	三田國文 No.69 (2024. 12) ,p.13- 37
JaLC DOI	10.14991/002.20241200-0013
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20241200-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慈鎮和尚自歌合の古写本

——国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書所収

「慈鎮大僧正御集」について——

太田 克也

慈鎮大僧正御集〔H・七四三・四八二〕

〔南北朝期〕写綴葉装一帖

改装海松色地金糸花鳥唐草文織出裂表紙。縦24.4cm×横15.9cm。料紙は斐紙。外題ナシ。内題、「慈鎮大僧正御集日吉七音」(前遊紙一オ)。見返し、表裏ともに朽葉色地金銀砂哥合子散らし。遊紙、前二丁、後一丁。墨付五十六丁。全五十九丁が三折から成る。第一折は九枚、第二折は十二枚、第三折は八枚だが、第一折の冒頭外側に半葉が付いている。

元表紙の役割を果たしていたか。每半葉十行、和歌一首二行書き。一行は和歌十七字程度、判詞十九字程度。字高、和歌約20.1cm、判詞約19.0cm。書写奥書ナシ。いくつかの歌に合点・二重合点を付すが、その意味は未詳。朱陽方印1 (縦1.0cm×横1.0cm、前遊紙一オ右下)。世尊寺行尹筆とする古筆了仲の極札(前遊紙二ウ)。「墨付五拾六枚外三白紙式枚／紙ノ目五拾壹□表紙共(黒円印)3」の貼紙(後遊紙オ)。箱が付属し、中に大倉汲水(了恵)の極札とその男好

斎の手紙がある。既存の目録4にも著録されている。

本史料は慈鎮和尚自歌合の伝本である。慈鎮和尚自歌合は慈円の歌(一部に藤原俊成、藤原兼実及び藤原良経の歌を含む)を結番した自歌合で、日吉七社に奉納されたものである。大比叡・小比叡・聖真子・八王子・客人・十禪師・三宮の各社に十五番を配し、俊成による判詞と歌が付されている。成立については明らかでないところもあるが、建久九年(一一九八)頃と考えられている。5(ただし現在見る形のもの、跋文によれば後に再奉納されたときの系統である。)西行の御裳濯河歌合・宮河歌合や良経の後京極殿自歌合などとともに、自歌合の初期のものとして注目され、また古来風躰抄の歌論にも通ずる俊成の歌観が見られる点でも重要な作品である。

この自歌合の伝本について、先行研究では約三十本を調査し、諸本は同一系統であること、形態上は客人八番の有無で分類できること、その中で永青文庫本(熊本大学附属図書館細川家北岡文庫蔵本「二〇七・三六・五」)が最善本であることな

どが明らかになっている。永青文庫本は禁裏本を書写させた、細川幽齋の識語を持つ本である。他の伝本も、いずれも江戸時代の書写になると見られ、古写本は見出されていない。

その中で本史料は、古写本の可能性を持つ唯一の伝本である。昭和十六年（一九四一年）四月九日付で重要美術品に認定されたもので、『国書総目録』にも掲載され、国立歴史民俗博物館で整理・公開されたにもかかわらず、その存在が忘れ去られていた。既存の目録によれば、書写年代は南北朝期と判定されており、これはおそらく了仲の極めを踏まえたものであろうが、異論を唱えるだけの徴証は見られない。ここでは従来の書写年代を追認しておくが、積極的な理由があるわけではない。なお、筆致や選択された字母からは、より古さを感じさせるが、あくまで個人的な印象である。

本文については後掲する翻刻を参照したいが、歌の出入り等の大きな相違は見られず、従来の本文と同一の系統である。ただし欠脱や誤写などが間々存し、最終的には諸本を精査した上で判断を下したいが、永青文庫本に取って代わる善本であるというわけではない。とはいえ、流布に当たり本文が大きな改変を蒙っていないことがわかるという点では意義がある。また本史料では、自歌合の成立を述べる跋文において、「後京極摂政為納言之時」とあるべきところを「後京極摂政為少納言之時」とする。内容からすれば前者が正しいのだが、だからといって後者の本文が後出だとは言えない。というのも、例えば島原図書館肥前島原松平文庫蔵本「一三八・四九」は、藤原定家筆本を冷泉政為のために写したという冷泉持為奥書本

を、寛文二年（一六六二）に一字違わず写したというものだが、こちらも「納言」ではなく「少納言」となっており、この本文がむしろ古いものに基づく可能性もあるからである。このように、本史料は慈鎮和尚自歌合の伝本に再検討の余地があることを示唆する。親本を含む諸本の伝来や伝本相互の関係性などを考慮に入れた本文研究が求められよう。

(1) 印記は判読できなかった。

(2) 判読できなかった。

(3) 印記は判読できなかったが、国立歴史民俗博物館のDBでは「延雪」と読んでいる。

(4) 川瀬一馬編『田中教忠蔵書目録』（自家版、一九八二年）、国立歴史民俗博物館資料目録四『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録』（国文学資料・聖教類編）（国立歴史民俗博物館、二〇〇五年）。

(5) 成立の問題を中心に論じたものに、谷山茂「慈鎮和尚自歌合成立年代攷」（谷山茂著作集四『新古今時代の歌合と歌壇』、角川書店、一九八三年、初出一九三五年）、石川一「慈円和歌論考」（笠間書院、一九九八年）、山本一「慈円の和歌と思想」（和泉書院、一九九九年）などがある。

(6) 日本古典文学大系七十四『歌合集』（谷山茂担当、細川家永青文庫叢刊八『歌合集』（汲古書院、一九八四年）解題（荒木尚担当）、『新編国歌大観』解題（藤平春男・石川一担当）石川一「校本『慈鎮和尚自歌合』（『広島女子大学文学部紀要』二十三、一九八八年）など。なお、石川一「慈鎮和尚自歌合」再考」（慈円法楽和歌論考）、勉誠出版、二〇一五年、初出二〇〇三年）には伝本一覽が付されている。

(7) 文部省教化局編『重要美術品等認定物件目録』（一九四三年）参照。

（附記）この蔵者からは原本閲覧の便宜をお取りはかり頂き、翻刻のご許可を賜った。ここに記して謝意を表す。

凡例

・ 翻刻に際して、前後の遊紙、付された極札や貼紙は省略した。

・ 底本の体裁はこれを改め、字下げや空白等を統一し、跋文の改行は適宜追い込んだ。

・ 漢字の字体は概ね通行のものに改めたが、一部保存したところがある。

・ (ママ) を振るべき箇所があるが、原則として省略した。

・ 丁の替わり目に」を付し、「(一オ) のように丁数と表裏を示した。

大比叡十五番

一番左持

しかのうらのなまにかけをやとすかな

わしのみ山にありあけの月

右 撰政

いにしへのつるのはやしにちる花の

にほひをよするしかの浦風

歌のみちはあきつしまのならひ日のもとの

国のことわざとなりにつれはこのよにうまれ

ぬるおとこ女わかくに、あとをたれ給神」(二オ)

仏までもこの事をはもてあそひ給なるへし

その中にいにしへよりみちをふかくおもへる

ともからをり／＼にたえざるへしいはゆるあかりては

柿本人丸山辺赤人それよりくたりては

在原業平朝臣花山の僧正并素性法師紀貫之

凡河内躬恒壬生忠岑等也哥のよきあしきをも

かやうの人にや思わくへかりけむいまのよには

我も人もいかなるをよろしといふへきそとも

しれる人はかたかるへししかるにいま二百

首の哥を百番につかひてな、のみやしろの」(二ウ)

宝のをまへにおの／＼十番までたてまつり

給事ありよりてこの哥のをとりまさりしら

したてまつるへきよしおほせかくることはかつ

わかむことに事をよせかつは結縁のため也

これをしゐていなひ申は本意なくもなりぬ

へくかくれのをそれも有ぬへし又しりかほに

しるし申せはすてに未得為得未證為證の

つみさりがたくなりぬへけれと神事といひ

結縁といひのかれかたきによりて癡狗のつち

くれをおひ□^一牛の尾を愛するかことく」(二オ)

おろかなる心みしかきことはまかせてしるし

申へきなるへし願は和光同塵のあはれみにてら

してみそなはしゆるされむ事をなむかし

こみ／＼も申といへる事しかりそも／＼一番の

つかひ左は鷺のみねの秋の月ひかりをやとし

右は鶴林の春の花にほひをよせたり両方

の本地春秋の花月いつれをまさると申

かたしよりて同科とす

二番左勝

しかの浦にいつゝのいろの波たて、」(二ウ)
あまくたりけるいにしへのあと

右

おほけなくうきよのたまにおほふかな
わかたつそまにすみそめの袖

この右の哥ははしめの五字よりこゝろおほ
きにこもりてすゑの句までいみしくをかしく

侍を左のしかの浦の波の色殊身にむ心ち

していにしへのあとをたちまさるへくや侍らん

三番左勝 立春

あさみとりはるはかすみなたつたやま」(三オ)

よはにやとしもひとりこえけむ

右 同

よしのやまはつ春かせのけさはまつ

さくらかえたをいかゝとふらん

左はたつた山の夜半のかすみ右はよしのやまの

春のかせ所さまも哥のすかたもともにえむには

侍を猶左のよはにや年もといへるわたりまさ

ると申へくや侍らん

四番左 山ふかくすむころ花を見て

しはのくに、ほはむ花はさもあらはあれ」(三ウ)

なかくてけりなうらめしの身や

右勝 出家の後花を見て

雲のうへの春こそさらにわすられぬ

花はかすにもおもひいてしを

左哥心かきりなくふかくこそ見え侍れ右○は歌
むかしよりよめりけん哥七首結縁のため

しるしたてまつれと侍しうちの哥にこそ侍けれ

この哥殊なる事侍らすた、花はかすにもと

いふすゑのくはかり事よろしく思給てしるしたて

まつりけるに侍りた、しいさ、かもかさりたる」(四オ)

事なく申へきよし侍しかはすゑのくはかりは

すこしよろしきにや侍らん返、もかたはら

いたく侍り

五番左持 更衣

ちりはて、花のかけなきこのもとに

たつことやすき夏ころもかな

右 卯花

このころはさくらかえたに雲はれて

うの○かきに月を見るかな

左は彼躬恒か春をおもはぬ時たにもたつ」(四ウ)

事やすきといふ哥を更衣に引よせて

たつ事やすき夏衣かなと侍まことにおかしく

こそ侍れ右又さくらか枝に雲はれて卯花

かきに月を見む心いみしくみえ侍れは旁心

うつりていつれを勝と申かたくなむ

六番左勝 秋哥の中に

草木まであきのあはれをしのへはや

のにも山にもつゆこほるらん

右 同

野辺ことにはなのたもとのしほるれは」(五才)
露に見ゆるあきのあはれは

左右の露のあはれは心すかたいつれとなくは
侍をしゐて吹毛侍れは右の哥中句にしほ

るれへはといひ下の句に秋のあはれと侍けるを

見給いたして哥合にかやうの事まではとかと

せぬ事も侍れと○事をよせて左猶まさる

と申へくやとそおほえ侍る

七番左勝 太宮のはし殿にて

てる月のひかりと、もになかれきて

をとさへすめるやまかはの水」(五ウ)

右 月あかき夜おほたけをのほるとて

おほたけのみねふく風に霧はれて

か、みの山に月そくもらぬ

峯ふく風に霧はれてといひて鏡の山見

わたされむほとまことにすかたもたかくは

侍を左光と、もになかれきてをとさへすめる

と侍る山河のけしき猶かきりなくや侍らん

八番左持 月の哥の中に

月かけのいりぬるあとにおもふかな

まよはむやみのゆくすゑのそら」(六オ)

右 同

かへりいて、のちのやみちをてらさなむ

こゝろにやとる山の葉の月

この左右哥又いりぬるあとに思かなといひ

心にやとる山のはの月と侍すかた心ともにふ
かくしてをよひかたく侍よりて持と申へくや

九番左勝 冬哥の中に

なかくわひぬたつたのさとの神無月

木の葉ふみわけとふ人もかな

右」(六ウ)

しもさゆる山たのくろのむらすゝき

かる人なしみのころかな

左右たつたのさとの神無月まことに心ほそく

思やられ侍りこの葉ふみわけといふことそ古今

にも侍を円位と申し上人もよみて侍しかと

これはたつたのさとめつらしくも侍れは猶

左まさり侍らん

十番左勝 冬哥の中に

なにはかた松のあらしに雲きえて

月のこほりにをしそたつなる」(七オ)

右 ちとり

よさの浦ひとりうきねのかちまくら

た、わかためのともちとりかな

左のなにはかた右のよさの浦所の有さま

ともにをかしくは思やられ侍を猶月のこほり

にたつらむをしのはかせ心すかたいますこし

えむにや侍らん左まさると申へくや

十一番左持 初恋

君かやとのおきのうは葉のいかならむ

けふき、そむるこひのはつかせ」(七ウ)

右 寄風恋

こゝろあらはふかすもあらなむよひくゝに
人まつやとの庭のまつかせ

左右の哥けふき、そむらん恋のはつ風人

まつ○庭のまつかせともにすかた心かきりなく

みえ侍いみしき持に侍へし

十二番左勝 述懐

世中をいまはの心つくからに
すきにしかたそいと、恋しき

右 同」(八オ)

よをいとふ心のふかくなるまゝに

すぐる月日をうちかそへつゝ

両首の述懐いづれをまさると申かたく侍と

おなしとのみもいかゝとて左のいまはの心います

こしまさると申へくや侍らん

十三番左勝 無常

なかきよのゆめのわかれとおもへとも

又このよにはあはむ物かは

右 同

昨日見し人はいかにとおとろけと」(八ウ)

猶なかきよの夢にそありける

左右の無常心すかたともに有かたくこそ

見え侍れ又このよにはといひ人はいかにとお

とろけはとゝいへるいづれをまさると申

かたくは侍れと猶左哥別の心あはれかき
り○侍にやよりて左勝と申へくや

十四番左勝 報恩舎利講に

けふのゝりはわしのたかねにいてしひの

かくれてのちのひかりなりけり

右 同」(九オ)

もろ人のうつもれぬ名をうれしとや

こけのしたにもけふは見るらん

左のわしのたかねの哥のたけ誠にをよひ

かたく 右のこけのしたにもといへる又

あはれにもかきりなくは侍れと猶かくれて

のちの光なりけりと侍ことにめつらしく

も左まさるへくや

十五番左持 塵点本

ゐるちりのつもりてたかくなる山の

おくよりいてし月を見るかな」(九ウ)

右 未顕真実

むねの月はけふのみそらをまつとてや

よそちの雲に雲かくれけむ

左の塵点の山右のよそちの雲ともに勝劣

難分同科とすへし

身のうきはひよしの山も雲やおほふ

心のやみになをまよふらん有注

小比叡十番^五

「一番左持」(二〇オ)

やわらくるかけもふもとにくまそなき
もとのひかりをみねにのこして

右 摂政

あさひさすそなたのそらのひかりこそ

山かけてらすあるし成けれ

左哥和光のかけふもとにくまなく右哥

東方のひかり地主とあらはれます心

ともに勝劣なし同科と申へし

二番左勝 述懐 入道殿

おのつからちかひのそこをさとりえて」(二〇ウ)
人にすきたるめくみをそまつ

右 同

松のかとのあとをおもはぬ身なりせは
まことにいゑをいてましものを

右のまことにいゑをといへる心もまことにしか

あるへき事に侍れとなを左のちかひのそこふ

かくや侍らんよりてまさと申へし

三番左持 春の哥の中に

たこの浦のなみにかすみの色さえて

はるのみなとにありあけの月」(二一オ)

右 春の哥 釈阿

またや見むかたの、みの、さくらかり

花のゆきちる春のあけほの

此右の哥又しるしてまつり侍りしうち

なりこれはさくらかりと申ことを人のあしく

申かたの侍れは事のついでに申きらむとて
つかまつれりしうへにすこしはよろしき

にやと思たまへ侍しをこの左哥なみに

霞の色さえてといひ春のみなとに有あけの

月と侍しそいみしくをかしく見え侍れまざると」(二一ウ)

申さまほしく侍れとかたの、みのもさす

かにおほえ侍りて同科にてや侍へからん

四番左勝 花の哥の中に

花ゆへにとひくる人のわかれまで

おもへはかなし春のやまかせ

右 同

ちるはなのふるさと、こそ成にけれ

わかすむやとの春のくれかた

左哥とひくる人のわかれまでといへるこ、ろ

春の風のうらみまことにしかあるへき事也」(二二オ)

右又末句なといとをかしく見え侍をなを

左すこしまさるへくや

五番左持 郭公

ほと、きすき、つとやおもふ五月雨に

くものほかなる夜はのひとこゑ

右 夏の哥

ほと、きすなく一こゑの夜はなれは

秋にはよひのありあけの月

左右両首ともに心ふかくして勝劣不分明持とすへし

六番左勝 秋哥中に」(一二ウ)

身にとまる思はをきのうは葉にて
このころかなし夕くれのそら

右 鹿哥

むへしこそこのころ物はあはれなれ
秋はかりきくさほしかのこゑ

両方秋の心いつれまさると思わきかたく侍れと
猶左の思をおきのといへる心まさると申へくや侍らん

七番左勝 月の哥あまたよみ侍ける中に
きよみかた月のひかりのさえぬれは
なみのうへにもしもはおきけり」(一二オ)

右 同

うちよするなみにありあけの月さえて
秋やかなしきすまのせきもり

左のきよみかせき右のすまの閑所さまも
月も光もあはれつきかたく侍にとりて

左の浪の上にも霜はをさけりといへる心猶
めつらしさもよきりなくみえ侍よりて右

まさると申へし

八番左勝 秋田を

わきてなといほもる袖のしほるらむ」(一二ウ)
いなはにかきる秋の風かは

右 秋哥の中に

ありつのゝをはななか下にふきこめて
風になみこす山をろしかな

此両首又さらに甲乙わかちかたく侍り右は

をはななか下に吹こめてといへる心におかしく
侍をしるての事に初五字やすこしさゝへて

はむつらん左のすかたことに始終をろかなる
所なく侍にやとて猶左まさるへくや侍らん

九番左侍 冬の哥中に」(二四オ)

月をおもふ秋のなこりのゆふくれに
木かけふきはらふ山をろしの風

右 月あかゝりける夜三位入道のもとへ

しもかれのまかきのすゝき秋にかへて
おなしみそらの月を見るかな

右 哥もとよりかきりなく思ふ給へ侍しを

左哥こかけ吹はらふといへる心又をとるへし
とみえす侍れは同科とすへくや

十番左勝 寄雲恋

こひしぬるよはのけふりの雲とならは」(二四ウ)
君かやとにやわきて時雨れん

右 同

くもさはくゆふへの空を君はよも

我たくひとはなめさるらん

左右の恋の心ともに甚深にして勝劣
なくは侍れと左のわきてしくれむといへる末句

なをまさり侍らん

十一番左 述懷

ひとかたにおもひとりにしこゝろには

猶そむかる、身をいかにせむ」(二五才)

右勝 同

(二重合忌) おもはねとよをそむかんといふ人の
をなしかすにや我もいりなん

両方述懐こゝろはともにふかく侍れと

右哥まさるへくや侍らん

十二番左 同

(二重合忌) 草のいほをいとひても又いか、せむ
つゆのいのちのかゝるかきりは

右勝 同

(二重合忌) 宮こにもなを山かけはありぬへし」(二五ウ)
こゝろと身とのひとつなりせは

左哥いとひても又いか、せむなといへる心

すかたをかしくは侍れを右哥宮こにも猶

山さとは有ぬへしといふ心ことにめつらしくも

みえ侍り右まさるへくや

十三番左 やまひにわつらひけるころ

(二重合忌) たのみこしわかふるてらのこけの下に

いつしかくちむ名こそをしけれ

右勝

よをいとふ心ふかきよしなとかたりしことを思
いて、四位上人がもとへつかはしける

世をいとふしるしもなくてすきこしを」(二六才)

君やあはれとみわの山もと

此つかひ又ともにしかあるへき事には侍を右の
みわの山もとをかしくきこえ侍は又右まさり侍らん

十四番左勝 月の哥の中に

このもとに月もひかりをやはらけて
神さひわたる峯のあきかせ

右 九月に無動寺にて報恩講をこなひて
さとりゆく雲はたかねにはれにけり

のとかにてらせ秋のよの月

右の雲はたかねにといへるすかた心をよひ」(二六ウ)
かたくは侍れとアキマゴ左の月も光をやはら

けてといへる峯の秋風なを身にしむ心ち

し侍よりて左まさりと申へくや

十五番左勝 金剛界五部よみける中に

いまはうへにひかりもあらしもち月と
かきるになれはひとときはのそら

右 菩薩十度をよみける中に智波羅蜜を

これそうきはうき身をやかてほとけそと

心えつへきこゝちこそすれ

右哥うき身をやかて仏そと侍も誠に」(二七才)

貴は侍れと猶左十五の月猶うへなくや侍へるらん

御やまかははやくしるしをたのめとも

たにのつらゝの猶むすふらん

聖真子十五番

一番左持

こゝのしなのたまのうてなのひかりこそ
みつひしりのかけとなりけれ

右 撰政

みちをかへてこのよにとをたる、かな」(一七ウ)
をはりむかへむむらさきのくも

左たまのうてな右むらさきの雲光色難分之
上ともに為神事勝劣なくてや侍らんよりて
持とすへし

二番左持

もろ人のねかひをみつのはまかせに
こゝろすゝしきしてのをとかな

右

わかねかふそのいにしへにふきかへせ
ひしりのあとをはらふたにかせ」(一八オ)

左の浜風右のたにかせともに心もすゝ
しくいにしへにもまことにふきかへすらむと

みえ侍れは同科とすへし

三番左 霞

はるかすみふしのけふりにやとかりて
いくへの山をへたてきぬらん

右勝 橋上霞を

かつしかやむかしのまゝのつきはしを
わすれすわたる春かすみかな

両方の霞左はふしのけふりにやとかれる」(一八ウ)

心めつらしくはみえ侍を右はかつしかまゝの
つきはしは事ふりたるやうには侍を昔
のまゝのとつゝけたるにすゑのくもことふ

りすきこえて右まさると申へくや

四番左勝 花

よしのやまなをしもをくに花さかは
又あくかるゝ身とや成なん

右 同

おもふへしことしはかりとなかめきて

よそちのはるのはなになれぬる」(一九オ)

左右の花哥右は初句をかしくおかれ四句

春なれぬる心もあはれおほく侍を左の

なをしもおくにといへる心ことにめつらし

くも侍にやよりて左まさるへくや侍らん

五番左勝 五月雨

山さとのゆきにはあともいとはれき

とへかし人の五月雨のころ

右 夏哥とて 釈阿

にはひくる花たちはなのそてのかに

涙つゆけきうたゝねの夢」(一九ウ)

この右哥又七首かうちに侍りけり テキマはたゝ

夢うつゝとなく昔をしのふ心はかりに侍り

右哥雪にはあともといひとへかし人のなといへる

すかたこと葉いみしくをかしく侍り尤以左

可為勝

六番左勝 七夕

たなはたのこゝろやそらにはれぬらむ

雲のころもに秋のはつかせ

右 同

中／＼にやみなるへしとおもひけり」(二一〇オ)
秋の七日のほしあひのそら

両首のたなはたすかたことはともにえむに
侍を左のすゑの句ことをかしきまざる
と申へし

七番左勝 故郷鹿

^(合息)ふるさとの庭のあるしと成にけり
のこりしのへのさをしかのこゑ

右 秋哥中に

うつしうへしもの野辺にそかへりゆく
あれてうれしきませのうちかな」(二一〇ウ)

左右の秋哥ともにすかたおかしく心ふかくは
侍を猶左の、こりし野辺のさをしかの声

ことをかしくきこゆ又以左為勝

八番左 月哥中に

有あけの月のゆくゑをなかめてそ
のてらのかねはきくへかりける

右勝 同

^(合息)いりぬれと涙のつゆにかけとめて
月はたもとに有あけのそら

両首の有明の月又ともにをかしくは侍を」(二二一オ)

右の月はたもとにありあけのそら猶

有かたく侍にやよりて右まざるへくや

九番左 冬のころ山さにて

冬かれの木すゑにあたる山風の

また吹たひはゆきのあまきる

右勝

みやまきの、こりはてたるこすゑより
猶しくる、はあらし成けり

左哥心詞幽玄の風体也但右哥のこり

はてたるといひ猶しくる、はなといへるすかた」(二二一ウ)
心ともによろしくきこえ侍りまざるへくや侍らん

十番左 後朝窓

かへるさの月そかなしきまところまで
やかてありあけをなかめしよりも

右勝 曉窓

^(合息)あか月のなみたやそらにたくふらん
袖にをちくるかねをとかな

両方恋のすかたこと葉勝劣なくは

侍を右の袖にをちくるかねのをとかたと
いへる心なをかきりなく侍へし又^{以右}〇為勝」(二二二オ)

十一番左持 述懷

^(合息)よのなかをおもひつ、けてねをなけは
こ、ろ月の袖にうつれる

右 同

^(合息)いかにしていま、て世にはありあけの
つきせぬものをいとふ心は

左のこ、ろ〇月右の有明ともに心ふかく
して勝劣わかちかたし同科とすへし

十二番左持 無常

とりへ山よはのけふりのたつたひに」(二三ウ)

人のおもひやいと、そふらん

右 同行に思ける人うちつゝきはかなく成に
ければおもひいて、

ふるさとをこふる涙やひとりゆく

ともなきやみの道しはの露

左右の哥心すかた又同科侍へし

十三番左

七宮かくれ給て雲林院にのちのわざ
などしてかへりてのち

かなしさをくものはやしにとめしより

涙のあめそはるゝまもなき

右勝 同周忌の日御はかにまいりて

(合忌)そこはかと思つゝ、けてきてみれば」(二三オ)

ことしのけふも袖はぬれけり

左雲のはやし涙のあめなとよせある

風体をかしく侍へし右ことしのけふもといへる

すかた尚まざると申へくや侍らん

十四番左持

秋のころ故内大臣の嵯峨の墓所にて念仏
などおこなひけるに

山さとの袖のもみちのいろそこさ

むかしをこふる秋のなみたに

右

観性法橋かくれてのち西山の往生院にて
如法経などかゝむとてまかり入たりけるに

たつね入わかたもとはつゆをちて

昔のあとに秋風そ アキマヅ ふく」(二三ウ)

両首左はむかしをこふる秋の涙右は昔のあとの

秋風ともにあはれあさからす侍り勝劣なかるへし

十五番左持

金剛界五部の中に蓮花部を

なかそゝれをなしひしりのめくりある

②字のはちすのむねにひらけぬ

右 妙法蓮花を

わしのやまやとせのゝりをいかにして

このはなにしもたとへそめけむ

左のきり く字右の妙蓮花勝負にをよふ

へからすや侍らんよりて同科とす」(二四オ)

いかゝ見るにしに心はかくれとも

猶たちかへるしかの浦なみ (三)

八王子十五番

一番左持

山かはのそこにやたれもしつまゝ、し

ちゝのてことにわたさゝりせは

右 撰政

かれはつるこすゑにはなもさきぬへし

神のめくみの春のはつかせ」(二四ウ)

左哥千手の誓願の心まことにたのもしく

侍事也右哥神のめくみの春のはつ風又その

しるしたちまちに見えぬへくおほえ侍れはいつ

れをまさるとも申かたく侍うへに神事の

つかひはしゐて勝劣あるへからす侍しなり

二番左勝

(二重合忌)おしなへてひよしのかけはくもらぬを

涙あやしき昨日今日かな

右

（二重合志）
ねかはくはしはしやみちにやすらひて」（二五〇）
か、けやせましのりのともし火

此両首こそ誠に涙あやしき程に覺侍を

大方は哥合の判はことにほめすことに難せず

とかやそ様々しく申物は申ことに侍れと

よろしきをは不称讃は無詮事也右哥の

心は又愚老か心願や、をこる所のおもむき也

そのころすてに聖真子の十五番のおくに

申出した、し猶左の涙のあやしきと

侍末句まざると申さはいか、とおほえ侍て勝と

や申へく侍らん」（二五ウ）

（三番左持） 春のころ大乗院より人のもとへつかはしける
（二重合志）
みせはやな志賀のからさきふもとなる

なからの山の春のけしきを

右 春の哥に

かほりくるはなの春風身にしめて

山こえくらすしかの宮人

左のなからの山右のしかの宮人所さま

おも^{（か）}□けをかしく哥のすかたこと葉も

ともに勝劣なく侍れは同科とすへし

四番左勝 春の哥中に」（二六オ）

さらもうみもひとつにかすむ波ちかな

あまのつりふねかへるかりかね

右 帰雁

涙をやかすみの袖にかしつらむ

春にわかれてかへるかりかね

春に別てといへるすかたまことに霞の袖に

なみたか、るらんとおほえ侍を左のひとつに

かすむ波路眺望の心おもかけおかしくや侍らん

五番左勝 夏哥よみける中に

くもるよの月にたとへむほと、きす

『なかくてはてぬる五月雨のそら』（二六ウ）
（以下小字）

右 夏夜

夏のよのかすにもいれしほと、きす

きなかぬさきにあくるしの、め』

左哥月にたとへんといへる心又ことにめつら

しく侍にやまさり侍へくや

六番左勝 月哥あまたよみける中に

みか月のほのめきいつるかきねより

やかて秋なるそらのかよひち

右 海辺夕月を

難波かたみちくるしほのひかりにて

あしへにやとるゆふつくよかな

ほのめきそむるかきねやかて秋ならむ事」（二七オ）

これも殊におかしくきこゆまさと申へし

七番左勝 雁

（二重合志）
いかにせむふしみのさとのありあけに

たのむのかりの月になくなる

右 秋の哥の中に 釈阿

ゆふされは野辺の秋風身にしめて

うつらなくなりふかくさの里

この右哥崇徳院の御時百首の内に侍り

これ又ことなる事なく侍りた、いせ物語に

ふかくさのさとの女うつらと成てといへる事を」(二七ウ)

はしめてよみて侍しをかの院のよろしく

御けしき侍しはかりにしるして侍しを左

哥ふしみの有あけに月になくむたの

むのかりいみしくをかしこそ侍れ右

尤勝に侍へし

八番左勝 秋のくれに

な^(二重合忌)か月もいく有あけに成ぬらん

あさち^か○しものいと、さひゆく

右 秋の霜を

もみち葉はをのかそめたる色そかし」(二八オ)

よそけにをけるけさのしもかな

よそけにおくらん霜まことにをかし侍を

又左哥いく有曙にといへる心猶えんにおほえ

侍り左まさるへくや

九番左勝 冬の哥中に

はつせ山しもにこたふる夜半のかねを

もろくもさそふかせのおとかな

右 同

しなかとりゐなのたひねのさ、枕

あられにたとるゆめち成けり」(二八ウ)

ゐなのたひねのさ、枕いみしくをかし侍を

猶はつせやまの夜半のかねをまろくさそふ

らん風のをと所さまもたちまさりてや侍らん

十番左勝 寄関窓

人^(合忌)こふる我なかめよとおもひけり

すまのせきやのありあけの月

右 旅恋

あつまちのよはのなかめをかたらなむ

宮この山にかゝる月かけ

すまの関屋の有明の月哥のすかたも所」(二九オ)

さまもなをえむに侍へし

十一番左勝 海路

なかむれはかすみも月もはてそなき

はると秋との波のかよひち

右 同

こきいて、いまはをきにも成ぬらむ

さしの松風こゑよはるなり

両方の海路こゝろことはともに勝劣なくは

侍を左春のかすみ秋の月なみちひさしく

なれたる程なを心ほそさもまさりてや侍らん」(二九ウ)

十二番左 山家

人はなし峯に松風まとに月

しめえてすめる山のおくかな

おかのへのさとのあるしをたつぬれば

人はこたえぬ山をろしのかせ

右勝 同

左のみねの松風まとの月山のおくのすみか

このもしくは侍を右のをかのへはさまて

ふかゝらぬは侍れと人はこたへさらむやま

をろしいみしく身にしみてすこしは」(三二〇オ)

なを右まさるへくや

十三番左持 山里

やまふかみさひしきやとのあるしとは

なりおほせたる身にもあるかな

右 同

山さにとひくる人のことくさは

このすまるこそうらやましけれ

二首の山居左のなりおほせたるらん心も

をかしく右のとひくる人のことくさも

さそ思けむとともに無勝劣侍へし」(三二〇ウ)

十四番左勝 百首の中に

人はみなあはれもしらてやみなまし

秋のゆふくれ春のあけほの

右 無常

よもきふにいつかおくへきつゆの身は

けふのゆふくれあすのあけほの

左右両首下句のすかたことはをなしくは

侍れと左のあはれもしらてやみなましと

いふ心猶まさるへくや侍らん

十五番左持 心念不空過」(三二一オ)

おしなへてむなしき空とおもひしに

ふちさきぬれはむらさきの雲

右 内菩薩行

いにしへのしかなくのへのいほりにも

こゝろの月はくもらさりけり

左心念不過の内⁽⁴⁾菩薩行むらさきの

雲こゝろの月ことはのよせともにをかし

く侍り勝劣なかるへしよりて同科とす

うくひすのえたのうつりにまよふかな

かれたるきたに花はさけとも有注」(三二一ウ)

客人十五番

一番左

かほくにあはれふことをたのむかな

こしちのゆきのふかきちかひに

右勝 撰政

こゝに又ひかりをわけてやとすかな

こしのしらねや雪のふるさと

左右ともにこしのゆきによせて弘誓の

ふかき心はをなしく侍を右のこしのしらねや

○いますこしまさるへくや侍らん」(三二一オ)

二番左

かすならぬみくつもすてすてらすこそ

ちりにましはる光なりけれ

右勝

ふるき風をいかてみやまにふかせまし

くすのうら葉のかへすくも

右哥こゝろ尚弘誓也み山の有風古歌きた

めて吹かへし侍らんかしよりて

まさると申へくや

三番左 花哥あまたよみける中に」(三三ウ)

さきそむるはなのこすゑをなかむれば

雲に成ゆくみよしのゝやま

右勝 同

(合息)よしのやま雲のいはねにちるはなは

風よりおつるたきのしらいと

両首のよしの山左のくもに成ゆくらん

心もおかしく侍を右の雲のいはねの花

かせよりをつらむたきのしらいとこ

とにおもしろくや侍らん

四番左勝 同」(三三才)

松かせになかめし秋は花ゆへに

いとふへしとおもはさりしを

右 同

はなさかり雲もの時雨もつゆもなし

ひとりつらきは春のやまかせ

左哥時につけつゝ心もかはりゆくこと

まことにあはれるなる物に侍り山家の秋は

桂月すこくてらし松嵐しつかに吹を

くりたる誠に身をわくる心こそはし

侍れすへて春の風はいとはしかるへし左」(三三ウ)

まさり侍らん

五番左持 夏哥の中に

雲まよふゆふへに秋をこめなから

かせもほにいてぬをきのうへかな

右 同

ゆふまくれ野さはに夏をわすれ水

けに秋ちかくとふほたるかな

左ゆふへに秋をこめなからといへるいと

をかしく侍り右又のさはに秋夏をわすれ

水なと詞つゝきいつれをまさると申かたし」(三四才)

よき持に侍へし

六番左 待月厭山

いとはしな山の葉もなきなみちにも

またては月のいつるものかは

右勝 月哥中に

ゆめかともをとろくはかりあはれにけなり

雲のころもをかへす月かけ

左哥またては月のなといへるすかたえむに

こそ侍めれ 右哥雲の衣をかへせる心猶

をかしくや侍らん」(三四ウ)

七番左勝 秋哥中に

よはにたくかひ屋のけふりたちそひて

あさ霧ふかしをやまたのはら

右 同

もしほやく煙もきりにうつもれぬ

すまのせきやの秋のゆふくれ

すまのせきやはすへてをりにつけつゝ、

をろかならぬをまして秋の夕くれおもひ

やられ侍を(アキマ) 左のをやまたのかひやの煙に

たちぞふらんあさきりふかく心ほそくや」(三五オ)

侍らん猶すこしはたちまさると申へくや

八番左勝 山ふかくすむころ月を見て

やまふかみたれ又かゝるすまゐして

まきの葉わくる月を見るらん

右 二条院の御時うへのおのことも法勝寺にて
月を見けるに 釈阿

いかなれはしつみなからに年をへて

よゝの雲ゐの月を見るらん

この右哥さすかに四代までの雲ゐの月を

見けむ事をあやしみけるはかりに侍

左哥まきの葉わくる月を見るらむと侍こゝろ」(三五ウ)

いみしくをかしく侍り以左可為勝

九番左 二集合志 雪の歌中に

庭のゆきにわかあとつけていてつるを

とはれにけりと人や見るらむ

右勝 同

(合志) けさみれは雪もつもの浦なれや

はまゝつかえの波につくまで

左とはれにけりなといへる心いとをかしくみえ侍れと

右の雪の(本マ)つもの浦ところさま松のゆきなど

おもかけおほく侍てまさと申へくや」(三六オ)

十番左勝 恋の歌に

うしかへし思こゝろになくさめて

こひにやとかるわか涙かな

右 契恋

たゝたのめたとへは人のいつはりを

かさねてこそは又もうらみめ

左右の恋ともに心ふかくきこえ侍を猶左

恋にやとかるらん末句めつらしくも侍にや

まさるへくや侍らん

十一番左持 狂歌」(三六ウ)

(あまち) やきよみかせきの月のよを

(二重合志) かそへてこそは思たちしか

右 同

(合志) 契つるそらゆく月の行す糸に

おもひもいてようつのやまもり

両方の旅の心またともにいつれをまさると

申かたし左のきよみかせきの月の夜

まことにさこそかそへておもひたつへくとも

侍り右のうつの山もりに月のゆくす糸

まで思いてよとまことにいはまほしかるへし」(三七オ)

同科とすへし

十二番左 同

たひのよに又たひねして草枕

ゆめのうちにも夢を見るかな

右勝 百首哥に

いけるひのうき世のなみにたゝよひて

くるしきうみのふねをしそおもふ

左のゆめのうちにも夢を見るらん心

をかしく侍を右のうき世なみにたゝ

よひてと侍もとり／＼にはおほえ侍れと右の」(三七ウ)

すゑのくあかしの浦のあさ霧思いてられて

おはりのくのこと葉心こもりてまさると

申へくや

十三番左 述懐

あはれにも心のすむによせし身の

やかてこゝろのやとゝ成ぬる

右勝 同

せめて猶うき世にとまる身ならねは

心のうちにやとはさためむ

左右述懐ともにこゝろふかくは見え侍れと」(三八オ)

右の哥うき世にとまるといへる心をろか

なる心にも所存に侍にやまさると申侍へし

十四番左持 同

さしはなれみかさの山をいてしより

身をしるあめにぬれぬひそなき

右 聞法述懐

のりのかとに心をいれておもふかな

たゝうき世をはいつへかりけり

左みかさの山をはなれて身をしるあめに

ぬれ右のりのかとに心をいれてうき世をは」(三八ウ)

いつへかりけりと侍心ともに事理かなへ

り同科とすへし

十五番左持 或住不退

わし(舎忌)のやまけふきくのりの道ならて

かへらぬやとにゆく人そなき

右 金剛界五部中に金剛部を

たのもしなうき世中のやふれやに

ひとりくたけぬのりのさと人

両方又勝劣なるへし猶持と申へくや

よるのつるかた／＼思このうちを」(三九オ)

かたちをわけてあはれとを見よ

十禪師十五番

一番左持

このさとのちりにましはるかけなくは

あさひまつまのやみいかにせむ

右 撰政

木のもとにうき世をてらすひかりこそ

くらき道にもありあけの月

左の哥朝日まつまのやみに切利天の」(三九ウ)

御時囑たのもしく侍事也右又くらき

みちにも有あけの月すかたこと葉もをか

しく侍り勝負なかるへし

二番左持

わかたのむ日よしのかけはおくやまの

しはのとまでもさゝさらめやは

右 山こもりして侍けるころ騒動いてきてのころ
物なく離山しにけるたゝひとりとりあて
はつ雪の朝尊円法師がもとへつけれ
いとゝしくむかしのあとやたえなんと
思もかなしけさのしらゆき」(四〇オ)

この左右の哥又もとより愚成忍くして
集に注入侍にしやうにこそおほえ侍ともに

更勝劣なかるへしよりて猶同科とす

三番左勝 花

こすゑには花のすかたを思はせて
まつさく物はうくひすのこゑ

右

はなの色や猶こからましにほふたに
山ほとゝきすこへてみたらは

両首の花のこゝろ左は鶯のこゑまつ」(四〇ウ)

右は郭公をすへんこと各をかしく

侍を猶左のうくひすまつさく花ならん

事ことにめつらしくも侍にや以左為勝

四番左 残春

三葉巻 山の葉にほひし花の雲さえて

はるのひかすは有あけの月

(合色) 右勝 三月尽

くれなるにかすみの袖も成にけり

春のわかれのくれかたのそら

くれかたの空かすみの空色のふかさも」(四一オ)

ことにえむに侍へ以右勝とすへくや

五番左 夏哥中に

やまかけやいはもるし水をとさへて
夏のほかなるひくらしのこゑ

右勝 同

なつふかきみねの松かえかせこえて

月かけすゝし有あけのやま

右夏のほかなるひくらしのこゑいみしく

をかしは侍を右の有明の山ことに有

かたくきこゆまさるに侍へし」(四一ウ)

六番左持 立秋

それも猶けふこそぬしの身にはしめ

こゝろよりふく秋のはつかせ

右 秋の哥よみける中に

人わかぬをきのうはかせふきぬなり

やまかけならすあきのゆふくれ

両方の秋風左心より吹右山かけならす

ともに更無勝劣同科とす

七番左 月哥よみける中に

あきのよの月のあたりのむら雲を」(四二オ)

はらふとすれはをきのうはかせ

右勝 同

月かけの身にしむをとゝなる物は

ひかりをわくるみねの松かせ

左右の月はらふとすれはおきのうはかせ

いみしくをかしは侍を右の光をわくらむ

峯の松風ことに身にしむをとゝならんと

おほえ侍は○猶まざるへきにや

八番左持 鹿

山さとのあか月かたのしかのねは」(四二ウ)

よはのあはれのかきりなりけり

右 同

しかのねををくる嵐にしられけり

やまのおくなる秋のあはれは

両方の鹿の散左のよはのあはれのかきり

右の山のおくのはれともに無勝負よ

りて同科とす

九番左 冬のころ人のもとへつけゝる

ひきかへてさひしさみかくのへの月

こほらぬ露にやとりし物を」(四三オ)

右勝 女御入内の御屏風に賀茂臨時祭かき
たる所に 観阿

月さゆるみたらし河にかけ見えて

こほりにする山あひの袖

左哥こほらぬ露にといへる心いみしく

をかしくこそ侍れ右の哥又御屏風の

哥のうちをしるし申て侍けるなり是は

みたらし河に月さえなとはつねの事なるを

こほりにするるといへる心許すこし思

かけおほえ侍によりて御屏風哥えりて

たてまつれと侍りしにもつたなき」(四三ウ)

哥の中にはこれひとつにてむをあひ侍

し也よりて猶左哥にまざると申侍らん

かたはらいたさことよろしからすこそおほえ侍れ

十番左持 恋

たまつさのあとたになしとなかめつ、

ゆふへの空にかりなきわたる

右 同

わが恋はにはのむら菰うらかれて

人をも身をもあきのゆふくれ

両首の恋左たまつさのあとたになかり」(四四オ)

けるゆふへのそら雁書のつらなりけむ心いみ

しくおかしく侍を右の人をも身をも

秋のゆふくれ又その心不少よりて同科とすへし

十一番左勝 百首の中に

むかし思たかつの宮のあとふりて

難波のあしにかよふ松かせ

右 同

あき風にふしのけふりのなひきゆくを

まちとる雲もそらにきえぬる

左なにはのあしにかよふらん松風ことに」(四四ウ)

さひてきこえ侍りまさり侍らん

十二番左 述懐

おもふへきわかちのよはあるかなきか

なければこそはこのよにもすめ

右勝

世中のうつゝのやみに見る夢の

おとろく程はねてかさめてか

左右述懐ともにふかくはみえ侍れと右のをとろく程はねてかきめてかといへる殊を

かしかるへしまさると申へくや」(四五才)

十三番左勝

四位上人廣川よりこのたひまかりいつる事の昔出家し侍りしその月日にあたりて申たりける返事に

うき世いてし月日のかけのめぐりきて

かはらぬみちを又てらすらん

右

同行に契れりける人さきたちて太原にこもりたりけるに

よをいとふ心のそらのひろければ

いることもなき月もすみなん

左月日のかけのめぐりきて侍ことはの

つゆ今すこし光あるやうに見え侍り

十四番左 無常」(四五ウ)

われもいつそあらましかはと見し人を

しのふとすれはいとゝそひゆく

右勝

はかなさにいかてたえましこれその

世のことほりと思なさすは

左右ともにすかたこと葉をかしくは侍を

左はなきかおほくもといふ哥なども侍を

右哥のことほりといへる心理しかるへく

めつらしくも侍にやまさるへきにや侍らん

十五番左持 菩薩十度中に檀波羅蜜を」(四六才)

いまはわれ山の葉ちかき月をたに

をしむましとそおもひしりぬる

右 法師品

こゝろすむ草のいほりののりの水にうれしく月のかけやとすらん

両方勝劣なく侍にやよりて持とすへ

し猶うたの道かやうにしりかほに申

侍こと返々かたはらいたく侍れとか

つは神鑑をゝそるゝによりて所存

かさねて申のふへく侍なり」(四六ウ)

おほかたは哥はかならずしもをか

しきふしをいひことの理をいひきらん

とせされとも本自詠哥といひて

たゝよみあげたるにもうちなかめ

たるにもなにとなくえむにも幽玄

にもきこゆる事のあるなるへし

よき哥になりぬれはその詞すかたの

ほかに景氣のそひたるなる事の

あるにやたとへは春花のあたりに

かすみのたなひき秋月のまへに」(四七才)

しかのこゑをきゝかきねの梅に春の

風のにはひ峯の紅葉にしくれのうち

ぞゝきなどするやうなる事のうかひてくる也〇つねに

申やうには侍れとかの月やあらぬ春や

むかしのといひむすふてのしづくにゝ

こるなといへるかなにとなくめてたく

きこゆるなりかやうなるすかたことはに

よみにせむとおもへる哥はちかきよに

ありかたき事なるをこのちかき年^は
よりこのかたみえ侍るおほん百首とも」(四七ウ)
かつはこの御哥合なところまことに

有かたき事とは見え侍すへてこの

みちはいみしくはむと思ふるき物をも

みつくさむなとするにもさらによらざる

へしかつはた、さきの世の契なるへし

すへて詩哥の道も大聖文殊の御智恵

よりもをこれる事なれば文殊の

御垂跡^ゝも母^(前カ)この砌にはあとをたれ社

檀をならへてをはしませは此哥合

をはいつれにもいかばかりもてあそひ」(四八才)

おほむ納受侍らむすらん当来普

見如来もひかりをやはらけてあま

ねくみそなはすらむとそおほえ侍

うけとりきうき身なりともまよはすな

みのりの月のいりかたのそら

三宮十五番

一番左勝

みつのやまにちりしくの^{りの}花見れは

我ちからそとしたひきにける」(四八ウ)

右 摂政

みな人につねにしたかふちかひより

あまねくにほふのりのはなかな

左右の、りのはな法華護のころ共に^{心歟}
勝劣なかるへした、^左○猶三山にちり

しくらむ心すこしはまさるへくや侍らん

二番左勝

わかたのむな、のやしらのゆふたすき

かけても六の道にかへすな

右」(四九才)

すゑをくめわか山河のみなかみに

みのりのふちはありとしらすや

左な、の社のゆふたすきかけても

六のなといへる心ことにをかしくや侍らん

三番左 春哥中に

むさしの、はるの気色もしられけり

かきねにめくむ草のゆかりに

右勝 同

かすみしくまつらのをきにこきいて、

もろこしまての春を見るかな」(四九ウ)

左かきねにめくむ草のゆかりをかしくは

侍をまつらのおきにもろこしまての春を

見るらん心猶およひかたく侍へし

四番左勝 花の哥の中に

はなはすきよしの、山はみわのやま

春のしるしはたちまるらん

右 同

雲ははな花はくもとてけふすきぬ

たかねはるけし春のゆふくれ

両首のすかた心ともにおかしきはきこえず」(五〇オ)

侍を猶左のよしの、山はみわの山と

いへる心春のしるしまさるへくや

五番左勝 鵜川

うかひふねあはれとそ見るもの、ふの

やそうちかはのゆふやみの空

右 家々納涼

やとからやす、む気色^もかはるらん

いたるにしみつ庭に松かせ

右の納涼ともにす、しからむとおほえ

侍を左の鵜河やそうちかはのゆふやみの」(五〇ウ)

そら哥のたけすかたことにみえ侍りま

さり侍へし

六番左 草花

しかもむしもくれてあはれはそふ野辺に

萩こそよるのにしきなりけれ

右勝 荳

ぬしはあれと野となりにけるまかきかな

をかやか下にうつらなくなり

左の草花はきこそよるのといへるおか

しく侍を右野となりにけるといひて」(五一オ)

したにうつらなくなりと侍すかた心猶

ふかくみえ侍りまさと申へくや

七番左持 秋哥中に

(二重合点) あきの野のす、のしのやのゆふくれも

猶身にをはぬすまる成けり

右 月の哥中に

思いるこ、ろす^の系に月さへて

ふかき色ある山のおくかな

左の、へのしのや右の山のおく^かふきいろ

あらんともにあさからすみえ侍り同科とすへし」(五一ウ)

八番左 月哥中に

やまのはにあかていりぬる月かけは

松のあらしにのこるなりけり

右勝 月あか、りける夜三位入道の許へ

(二重合点) もみち吹風のたよりに月をちて

しもにうらある庭のおもかな

左右両首入ぬる月の松の嵐にのこりける

心もいみしくふかくは侍をもみち吹かせに

月をち霜にうらある心かきりなくおほえ

そめ侍にしかはにや猶まさるへくやとそおほえ侍」

(五一オ)

九番左勝 時雨を

(二重合点) よひのまはもらぬこの葉も袖ぬれて

時雨になりぬあか月のそら

右 落葉を

しくれつる峯のむら雲はれのきて

かせよりふるはこの葉成けり

風よりふるはといへる心いみしくをか

しくは見侍りた、左の時雨に

成ぬと侍暁の空猶殊勝にきこえ侍

左まさり侍らん」(五二ウ)

十番左勝 尋恋

こゝろこそゆくゑもしらねみわのやま
すきのこすゑのゆふくれのそら

右 恋哥の中に

ふしのねもあさまの山もおのつから
たえ／＼にこそ煙たつなれ

両首の恋又ともに勝劣なくは侍をすき
のこすゑの夕くれのそらすかたもなを

まさるへくや侍らん

十一番左持 「百首の中に」(五三オ)

とくみのりきくのしらつゆ夜もおきて
つとめてきえむことをしそ思

右 菊を

うき世かなよはひのへてもなにかせん
くますはくますきくの下水

両方の菊心ともに無勝劣同科とすへし

十二番左 述懐

何ゆへにこのよをふかくいとふそと
人のとへかしやすくこたへむ

右勝 同」(五三ウ)

みな人のしりかほにしてしらぬかな
かならずしぬる別ありとは

左右述懐又おかしくみえ侍れと猶

右の末句まことにさることに侍り

まさると申侍へし

十三番左 旅哥

草まぐらかりねの夢にいる物は
いてし宮この有あけの月

右勝 同

かへりこはかさなる山の峯のことに」(五四オ)
とまるこゝろはしほりにせむ

いてし宮この有明の月まことに夢
にもわすれかたく侍へけれととまる

心をしほりにせん事はことにめつらしく

侍へしまさるとすへし

十四番左持 「百首の中に」

はるも秋もこゝにはしかし夏かりの
あしのまろ屋のあめのゆふくれ

右 旅哥中に 釈阿

なつかりのあしのかりやもあはれなり」(五四ウ)
たえまの月のあけかたの空

此旅の哥又たま江の蘆をふみしたきと

いふ哥の、ちはいとも見えぬと思たまへてたま
江の月はよろしくやと思たまへ侍しを

葦のまろ屋のあめのゆふくれと侍れは

おなしと申侍例のかたはらいいたさかきり
なく侍り

十五番左持 乘是宝車

いまそしるけふのくるまにのりの道は
かとりほかに有ける物を」(五五才)

右 不求自得

船のうちに年つむ人を思にも

もとめてこそはなをえさりしか

左の門外^右のふねのうち又勝劣なかる

へし同科に侍へし

ゆめにまよふ心のやみもあはれかけて

かならずさそへにしにゆく月

(以下余白)(五五ウ)

此哥合者判者俊成入道自筆判書之正本也以信定^{從四位小納言}令書之為

七卷今為貽持來折重為一帖

去建久初之比後京極攝政為少納言之時予詠哥之中撰定二百首

^{但百九}十首也為歌合七社各十五番第一番右哥各詠加被番之則令清書之

給又判者俊成卿所詠之哥中可撰加七首之由相語之間撰送之仍每

社加番之則大宮四番右三宮三首右聖真子五番右八王子七番右客

人八番右十禪師九番右三宮十四番右哥等是能書当世第一也哥

仙当世第一也予本哥法施之余假世俗法樂神國風俗尤可為珍歟結

構此法樂彼臣殊取棄有沙汰如存送之了令納七社宝藤^殿了嚴觀攝政

^{後法性}寺殿為結縁又令加一首給二宮第二番左哥是也又判者每卷奥書

付一首詠哥者也其後清書家撰録運遂以來予任天台座主判者入道

又保九十算納受之至也又其後上皇令好和哥之道給之間仁和寺」

(五六才) 御室守覺親王等被詠進百首其中存有和哥召又予余命

及七旬之間詠百首法樂諸社勅 上皇令撰新古今給之時予所詠之

哥被撰入八十余首之現存之人無此例歟其新古今之後所詠之百首
七箇度其中哥定勝於昔詠歟仍各申請弥重清書等納神殿者也
三十余年之後承久三年五月雨之比記置之于時^{天下不静歟}後人勿嘲哂
奴力く

承久三年後十月廿日書写畢受吉水前大
僧正御本也

在御判」(五六ウ)

注

(1) 「ホ」の右に「去」のくずしのような文字があり、その下に「ハ」がある。

(2) 梵字のキリク。

(3) 諸本、この後に「久雖願西土之運転可留東湖之御故云」あり。

(4) 書き差して偏の「ㇿ」のみ。

(5) 諸本、この後に「侍りける在明の月にさらにおとるまじく」あり。

(おおた・かつや)